

◆海員随想 続ボーイ長（見習い）賛助組合員② 今井 武

【ボーイ長の船内生活】

私の船員たる実地教育は完璧には程遠く、その後スチームウインチの操作も不慣れな手つきでデリックブームの上げ下ろしを実行した。だんだん時が経ち、揺れる波間にふとボーイ長コンプレックスを体に覚えながら。

それからしばらく後の1950(昭和25)年、海技専門学院(神戸市)の通信教育部の募集で、その一期生として入学。しかし資格取得まで根を詰めること考える余裕もなく。たとえ少しでも船員たる正しい「技」の知識に接したい思いだった。そうして学院との通信教育の往復は、熱心な担任の教育をありがたく受けた。

これら数々の経験は厳しさの反面、私にとってごく平穏な日々でもあったが、また大変な悩みにもまともれた。それは船酔いの“港弁慶灘幽霊”ではないが、少し波が荒くなると、ただちに“大病”をわずらう奇態をさらした。中には今生の病のような様態の者もいた。

初乗船で家を出る時、母からまじないを。それは、おへそに梅干を乗せてベルトで押さえておく効験だ。酔いは徐々に消えていく。

その後、今までの洞海湾への航海が変針した。仕向け地は日本海を航く能登の七尾だった。入港すると即、揚げ荷役。その最中へ当地の海員養成所の生徒10人が自由見学のため訪れた。ここでボーイ長は、やっとならずか2時間の先輩としての対応で船内見学の案内役を務めた。

仕事が終わると、招かれるまま学校を訪問、教官と面談して時間制限に合わせて辞し、帰船。この卒業した生徒数人は、ボーイ長として各社へ乗船後、先輩ボーイ長と文通が長く続いた。

七尾を出港してさらに針路を北にとって、初めての小樽へ入港、山々は冠雪の美観に装飾。翌朝、昨夜の大雪が碇泊船を厚い綿衣で覆う。当港は函館港と並んでサハリン、千島の引揚船の集結地で、氷解のその時を待っていた。積雪の除雪作業は甲板部、機関部は船内に終日暖房を通し、パイプの氷結も防ぐ。デッキにみんなで誕生させた可愛い雪だるまの姿は、雪国歓迎のマスコットだった。

小樽には戦前の昭和初期開店した木下船舶写真館があった。この写真屋さんが訪船してきたときは、私はボーイ長の立場からコックさんに依頼して、どんぶり飯の昼食を木下さんへのサービスとして出すことを忘れなかった。そうした仲から、木下氏は海の記念日やその他の上陸時に「ぜひ店に寄ってください。娘もいますよー」の言葉に甘えて、小樽入港のたびに立ち寄り、飲酒などで招かれ、娘さんと話す楽しみもあった。戦前この写真館は、別に存在した「無線技倶楽部」と対になって、『蟹工船』の著者・小林多喜二たちの“アジト”であったことから、存命中の多喜二の古い話を耳にする機会があった。

そして、木下卯八さんが参加していた「海上消費組合」と並んで海上労働運動の原点ともいえる「北方属員倶楽部」が共に闘った時代でもあったことの話に感銘を受け、この胸を打った。また

今、各地にある退職船員 OB 会のはじまりが、この小樽で発祥した「かたふり会」であることもその歴史の中にあった。

次航海は珍しく天塩海岸の遠別への道材積み取りだ。作業員 30 数人と装具を積みオープン・ロードの遠別へ到着。小樽から 14 時間。荷役は海岸まで雪上を馬が材木を曳き、筏で本船着け、木遣歌も声高々の積荷。

作業班は本船の船尾のスペースに“一部落”を設営し、時差で本船の調理室を利用。荷役はスムーズに運んでいたが、荒天のため衝撃がりの真夜中、アンカーが引けて岩盤に座礁。思いがけぬ災難で危機一髪。船は傾斜したまま大波の翻弄は止まなかった。

「海員だより」